

改訂版の序

今回、輸液療法マニュアルの全面的な改訂を行った。初版では多数の読者の篤い支持を受け、好評のうちに増刷を重ねてきた。しかし、発刊から7年近く経過したため改訂の必要があると考えるに至った。輸液療法を実施するにあたっての技術的な面や理論的な面には大きな変化はみられないが、電解質代謝に関する基礎的な知見には新たな進歩があり、また使用する輸液剤が年月のうちに市販されなくなったものがあるという輸液製剤の変遷があり、これらのことから改訂を余儀なくされたというのが大きな理由である。

輸液療法は臨床の現場では習得しなければならない必須の知識であり、治療を実践するためには水・電解質の基本的な内容を理解しておくことが大切である。この知識を有しているかどうかにより輸液治療の優劣の差がでてしまう。水・電解質の調整の要となる腎臓の働きを理解してこそ、輸液の効果をさらに活かすことができると考えられる。腎臓の働きに問題がなければ、軽度の水・電解質異常であれば間に合わせ的な輸液治療によっても何とか問題なく改善させることは可能である。しかし高度の電解質異常であるとか、腎臓を含む調節系を障害する特殊な病態においては、それなりの知識を有しておかないと逆に医原的な病態を新たに招来してしまうことが少なくない。このような意味から、基本となる知識の習得が重要となるわけである。

より詳細な知識を必要と考える読者においてはより高度な書籍を参照していただきたいが、本書ではコンパクトな書籍のな

かに、必要最小限度の最新知識を含めて、複雑な輸液治療のコツや注意点などを図表とともに述べてある。

今回は執筆者を大幅に変更して内容を一新した。このため初版本とは異なった感を抱くことになるかもしれないが、基本となる臨床の場でのポケットマニュアルとしての内容、輸液治療の実施の際に気軽に紐解いて参考にすることができるハンディーな書籍というポリシーは変えてない。また今回は、新たに実際の症例をもとに、どのように輸液を組立てていくのか、具体的な輸液の処方例についてQ & A形式で解説した項目を加えたのも目新しい部分といえる。専門家の考え方がわかり、参考になると思われる。

輸液治療に係わり合いの深い臨床の現場で、以前に増して本書が有用に使用されることを願っている。

2010年2月

執筆陣を代表して
北岡建樹